

業 務 編

蘇

蘇

業

第1章 診療各科

〈入院患者疾患別内訳〉

国際疾患分類別、年齢別、性別、退院患者延数(平成28年度)

年齢				～4週	4週～1年	1年～3年	3年～6年	6年～12年	12年～	平均在院日数	死亡患者数	
				計	男	女	計	男	女			計
疾病	計	計	5,923	403	643	1,066	1,134	1,451	1,226	12.4	19	
		男	3,392	239	347	560	674	855	717	12.2	13	
		女	2,531	164	296	506	460	596	509	12.7	6	
I 感染症および寄生虫症	計	計	135	69	2	8	16	15	17	11	17.5	1
		女	66	66	7	10	14	12	13	10	12.3	0
II 新生物	悪性	計	551	318	1	0	44	109	78	86	24.1	4
		女	233	233	1	7	44	63	82	36	24.7	1
	良性 性質不詳	計	299	147	3	26	50	27	32	9	7.3	1
		女	152	152	2	27	49	28	34	12	6.2	0
III 血液および造血器の疾患 ならびに免疫機構の障害	計	計	364	200	0	5	13	61	50	71	5.8	0
		女	164	164	0	4	40	58	32	30	6.1	0
IV 内分泌、栄養および代謝疾患	計	計	352	266	8	5	9	56	125	63	5.3	0
		女	86	86	9	4	5	12	52	4	12.6	1
V 精神および行動の障害	計	計	23	13	0	1	1	3	3	5	15.6	0
		女	10	10	0	0	0	1	3	6	25.1	0
VI 神経系および感覚器の疾患	てんかん 発作性障害	計	133	68	1	10	10	9	25	13	12.6	0
		女	65	65	0	8	15	12	19	11	17.1	0
	脳性麻痺 神経疾患	計	111	63	1	5	4	17	14	22	13.2	0
		女	48	48	1	5	9	9	15	9	19.7	0
VII 眼および付属器の疾患	計	計	137	59	0	1	7	21	24	6	3.1	0
		女	78	78	1	5	8	25	35	4	5.2	0
VIII 耳および乳様突起の疾患	計	計	40	30	0	0	3	7	14	6	5.2	0
		女	10	10	0	0	2	2	5	1	6.1	0
IX 循環器系の疾患	脳血管 疾患	計	10	6	1	0	0	2	3	0	16.5	0
		女	4	4	0	1	0	0	3	0	28.5	0
	不整脈 その他	計	110	53	7	7	11	7	8	13	18.5	0
		女	57	57	8	8	11	4	10	16	14.1	2
X 呼吸器系の疾患	インフルエンザ および肺炎	計	70	47	1	1	5	9	19	12	14.5	1
		女	23	23	0	2	3	7	8	3	13.3	0
	気管支炎 その他	計	211	128	5	6	13	51	36	17	13.3	0
		女	83	83	1	10	13	25	22	12	11.8	1
XI 消化器系の疾患	ヘルニア	計	228	119	1	11	43	36	24	4	3.7	1
		女	109	109	0	4	28	43	28	6	3.1	0
	イレウス その他	計	452	262	5	9	19	17	54	158	6.9	0
		女	190	190	2	11	20	12	48	97	7.2	0
XII 皮膚および皮下組織の疾患	計	計	68	33	0	4	12	6	7	4	9.2	0
		女	35	35	1	2	8	6	5	13	16.7	0
XIII 筋骨格系および 結合組織の疾患	川崎病	計	52	35	0	11	10	7	7	0	26.8	0
		女	17	17	0	3	6	3	5	0	12.6	0
	関節障害 その他	計	383	186	0	0	2	28	95	61	9.8	0
		女	197	197	0	1	20	18	34	124	13.0	0

						～4週	4週～1年	1年～3年	3年～6年	6年～12年	12年～	平均在院日数	死亡患者数	
XIV	尿路性器系の疾患	計	344	男	241	1	35	39	47	64	55	10.3	0	
				女	103	0	16	21	14	29	23	9.5	0	
XVI	周産期に発症した主要病態	L F D S F D	計	0	男	0	0	0	0	0	0	0.0	0	
					女	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0
		早期産児	計	68	男	43	43	0	0	0	0	0	38.6	0
					女	25	24	0	0	0	1	0	41.9	0
		H F D 巨大児	計	2	男	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0
					女	2	2	0	0	0	0	0	19.0	0
その他	計	191	男	122	113	5	0	2	2	0	24.0	0		
			女	69	62	2	0	2	1	2	23.1	0		
XVII	先天奇形、変形常および染色体異常	神経	計	28	男	9	3	0	0	1	3	2	18.0	0
					女	19	0	2	7	6	4	0	13.1	0
		眼	計	23	男	10	0	1	5	3	1	0	2.6	0
					女	13	0	3	4	3	3	0	3.1	0
		耳	計	29	男	9	0	4	2	3	0	0	4.0	0
					女	20	0	7	6	5	2	0	3.4	0
		顔面・顔頸部	計	22	男	8	0	2	2	0	2	2	6.1	0
					女	14	0	4	3	4	3	0	3.7	0
		循環器系	計	346	男	200	13	52	48	33	19	35	13.6	1
					女	146	14	36	41	16	22	17	14.8	1
		呼吸器系	計	15	男	6	2	2	0	2	0	0	91.8	0
					女	9	2	3	2	1	0	1	19.9	0
		唇裂・口蓋裂	計	110	男	53	1	20	11	3	12	6	10.3	0
女	57				2	22	19	2	6	6	10.0	0		
消化器系	計	82	男	48	8	14	10	7	8	1	14.8	0		
			女	34	7	10	7	5	4	1	18.7	0		
性器	計	160	男	158	1	5	86	41	22	3	4.5	0		
			女	2	0	1	0	1	0	0	15.5	0		
尿路系	計	81	男	45	1	15	15	4	9	1	7.3	0		
			女	36	0	17	10	5	4	0	7.7	0		
筋・骨格	計	244	男	127	0	55	27	20	15	10	9.6	0		
			女	117	1	29	30	24	19	14	14.5	0		
皮膚・その他先天奇形	計	118	男	41	5	6	14	4	6	6	9.7	1		
			女	77	5	13	27	15	10	7	7.1	0		
染色体	計	21	男	10	6	0	0	0	3	1	20.5	1		
			女	11	6	1	0	1	2	1	41.5	0		
XVIII	症状、徴候および異常臨床所見	計	113	男	54	4	3	12	8	18	9	7.6	0	
				女	59	5	5	13	3	8	25	9.9	0	
XIX	損傷、中毒および他の外因の影響	計	176	男	93	2	17	17	7	30	20	14.4	1	
				女	83	1	13	20	13	22	14	16.2	0	
XXI	健康状態に影響をおよぼす要因および保健サービスの利用	計	21	男	13	0	1	0	1	6	5	20.4	1	
				女	8	0	0	1	0	3	4	17.5	0	

注1) 病名は退院要約の主病名によった。

注2) 疾病分類はICDによった。

注3) 転科した場合、転科毎に1人とした。

注4) 年齢は入院時のものとした。

注5) 1C(救急病床)入院分は除いた。

<内科系診療部門>

総合診療科

平成28年度の総合診療科の体制は、大きく変化しました。年度途中である12月27日の新病院への移転に伴い、本格的な集中治療および救急診療が稼働開始となり、当科設立当初からの業務が見直され再編成されることになったためです。新体制移行に先立ち、10月から科長が鍵本医師（附属岩槻診療所所長に異動）から田中（神経科/保健発達部から異動）に交代しました。新メンバーとして杉山医師（10月から）および後藤医師（29年1月から）が加入し、4月からの新総合診療科の準備に奔走しました。以前から当科を支えてきた南部、松岡、原の3医師は、29年1月に設立された消化器肝臓科と併任し、4月の標榜開始に備えました。10月から当科レジデントが異動でいなくなり、後期研修医3年目の吉田医師が10月からローテーションに入り、4月からレジデントとして引き続き当科業務と消化管内視鏡の研修を継続することになりました。10月から新病院移転までの間の約3か月間、手薄になった当科の救急および入院患者管理を、集中治療科の植田部長の配慮により利根澤医師および山澤医師が交替でサポートしてくれました。そして、平成14年から当センターにおいて救急・集中治療・虐待対応・消化器疾患診療・その他多岐にわたる業務をこなされた諸先輩方に対し、ここに敬意を表します。

平成29年12月27日の新病院移転以降、PICU/HCU退室後の患者管理、複数の医学的問題点を持つ患児の全身管理、在宅医療サポートおよび被虐待児対応等の業務を関係各科・部署と連携してすすめています。従来通りに臨床研修医およびレジデントの研鑽的努力に支えられており、頭・手・足を使った医療を実践する環境をスタッフは整備しています。

外来および入院の患者内訳をそれぞれ表に示します。外来初診患者（救急を含む）は約600人で、移転準備に入る11月までの間は紹介・依頼を極力お断りすること無く受け入れました。29年4月に診療科が独立した消化器系の疾患・症状が依頼理由として最も多く、その他に呼吸・感染症・成長および発達の問題等多彩な事例を扱ってきたことがわかります。けいれん発作や異物誤飲といった急性疾患は救急診療科の設立以降は当科で扱うことはなくなり、被虐待児は救急やHCU経由で当科が扱うようになりました。入院患者は約630人で消化器疾患のほか、呼吸器疾患、感染症や脳症といった急性期診療、そして被虐待児診療の要として院内外の医学的・社会的要請に貢献しました。消化器内視鏡検査は、300件の大台に到達しました。全国でも有数の症例、検査数として4月の消化器・肝臓科の開始に大きく弾みがつきました。

(田中学)

表1 外来初診患者 (597人)

	2016年4～12月	2017年1～3月
消化器症状(腹痛, 便秘, 下痢, 吐気)	150	46
肝機能障害, 黄疸	29	9
発熱	32	4
呼吸障害, 喘息	35	8
頸部等の腫瘍, リンパ節腫脹	19	4
頭痛	18	7
めまい, 立ちくらみ	18	9
けいれん	23	1
成長障害, 体重増加不良	19	5
発達の遅れ	12	4
アレルギー	7	1
異物誤飲	6	0
被虐待児	6	0
その他	97	28
合計	471	126

表2 消化器内視鏡検査 (300件)

上部消化管内視鏡検査	137
大腸内視鏡検査	120
カプセル内視鏡検査	33
小腸バルーン内視鏡検査	5
内視鏡的逆行性胆道造影検査	5

表3 入院患者 (629人, 死亡1人)

消化器疾患	潰瘍性大腸炎	63	呼吸器疾患	上気道炎, 咽頭炎	4	
	クローン病	65		肺炎, 気管支炎	24	
	自己炎症性腸炎	14		うちRSV	9	
	ベーチェット病	7		うちhMPV	2	
	好酸球性腸炎	3		気管支喘息	9	
	消化管アレルギー	18		クループ	1	
	十二指腸潰瘍	9		その他	5	
	上部消化管出血	3		感染症	胃腸炎	28
	大腸ポリープ	10			尿路感染症	5
	急性膵炎	3			蜂窩織炎	3
	慢性膵炎	4			リンパ節炎	7
	胆道閉鎖症	1			菌血症	4
	新生児肝炎	2			髄膜炎	2
	急性胆嚢炎	4		その他	19	
	機能性ディスペプシア	8		腎疾患	6	
	便秘症	1		神経疾患	急性脳症	3
	周期性嘔吐症	21			熱性けいれん	10
	ケトン性嘔吐症	1			その他	9
	体重増加不良	5		重症心身障害児	気道感染症	87
	IgA血管炎	6			尿路感染症	6
	その他	41			その他感染	18
	その他	41			社会的事情による	13
	事故等	異物誤飲		4	その他	57
溺水		1				
被虐待児症候群		15				

基礎疾患：染色体異常(21トリソミー, 4pモノソミー, 13トリソミー, 18トリソミー等)

代謝異常(メンケス病, ゴーシェ病2型, メチルマロン酸尿症, ミトコンドリア病, 尿素サイクル異常症等)

症候群(ROHHAD, VACTERL, Shimitar, Lowe, 等)

神経疾患(滑脳症, 二分脊椎, キアリ奇形, 筋ジストロフィー等)

脳性麻痺, 蘇生後脳症等

総合周産期母子医療センター新生児科

2016年度総入院数は371人(前年比-14.1%)であった。入院の内訳は、在胎週数が未熟で出生体重の小さい超低出生体重児(出生体重1000g未満)が14人(前年度より-2人)、極低出生体重児(出生体重1000-1500g未満)が26名(前年度より+4人)、低出生体重児(出生体重1500-2500g未満)が93名(前年度より-51人)であった。在胎期間別内訳は22-24W:6名、25-27W:14名、28-30W:14名、31-33W:25名、34-36W:55名、37W以上:213名であった。重症新生児仮死や遷延性肺高血圧症、胎便吸引症候群、重症新生児仮死などの出生体重2500g以上の児は238名で総入院数の64.2%であった。

総依頼件数は517件(-26件)であった。入院依頼をお断りしなければならない件数及び当センターの院内他科に入院依頼した件数は146(+35件)となった。

当センターの新生児搬送車による総出動件数は181件(+153件)であり、その内訳は、迎え搬送122件、三角搬送4件、分娩立ち会い63件、back transfer51件であった。

特殊治療としては一酸化窒素吸入療法11件、脳低温療法26件、脳平温療法34件、血液透析3件、ECMO2件、人工換気療法181件(入院患児の48.8%)であった。

死亡数は4名で剖検率は50.0%であった。染色体異常・奇形症候群などで死亡したのは3名(13torisomy:1名、多発奇形:1名、先天性横隔膜ヘルニア:1名)で、それ以外で死亡したのは1名(HIE:1名)であった。

2016年度在籍 常勤医(8名):

清水正樹(部長兼科長、日本小児科学会専門医、日本周産期・新生児学会専門医)

川畑 建(副部長、日本小児科学会専門医、日本周産期・新生児学会専門医)

菅野雅美(医長、日本小児科学会専門医)

閑野将行(医長、日本小児科学会専門医、日本周産期・新生児学会専門医)

閑野知佳(医長、日本小児科学会専門医)

佐伯久子(医長、日本小児科学会専門医、日本周産期・新生児学会専門医)

今西利之(医長、日本小児科学会専門医)

芳賀光洋(医員、日本小児科学会専門医)

常勤的非常勤(4名):小林亮太、鳥山奏嵩、小竹悠子、岡井真史

後期研修医(4名):平野紗智子、田代昌久、長谷川玲、江花涼

図1総依頼件数(入院数+お断り件数)

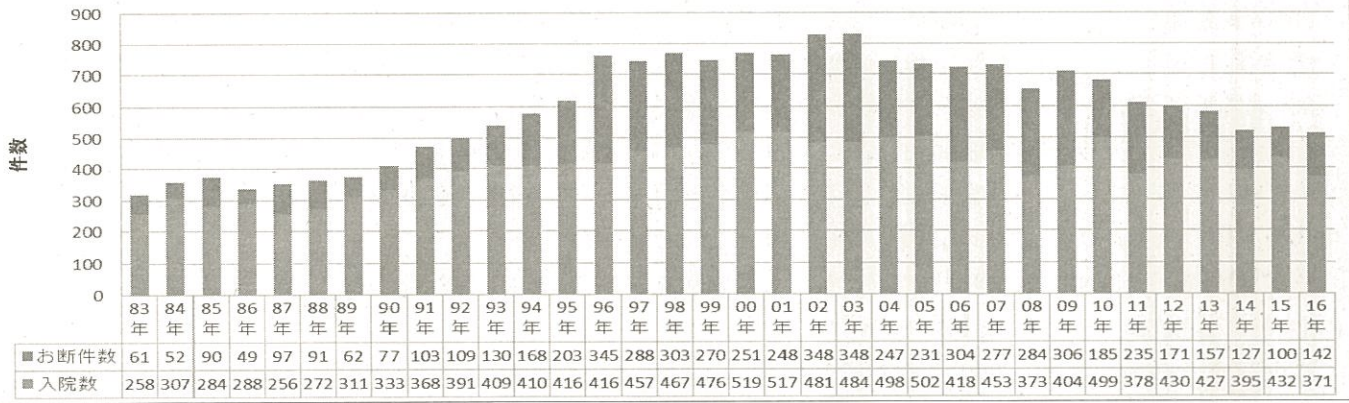


図2新生児搬送の内訳

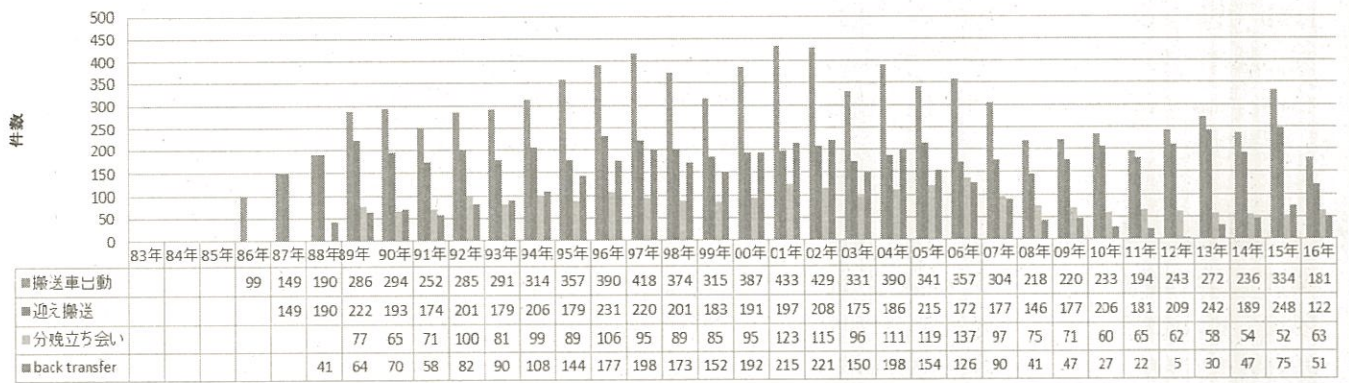
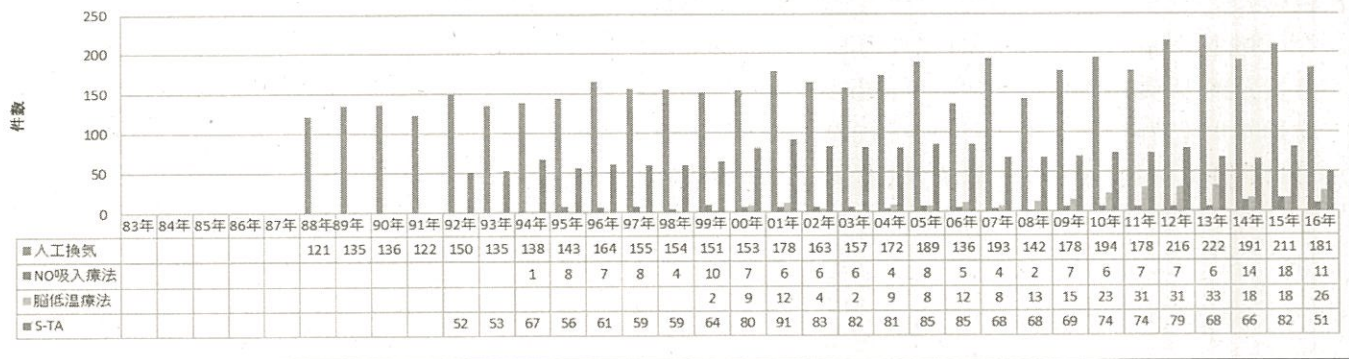
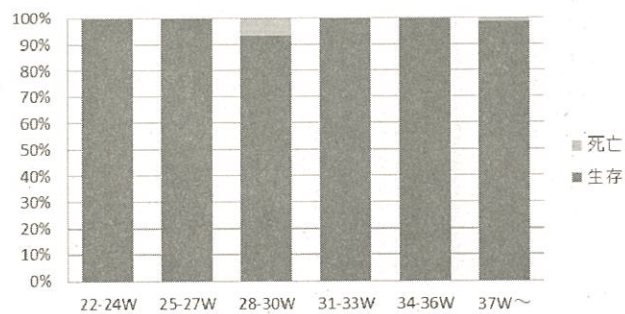


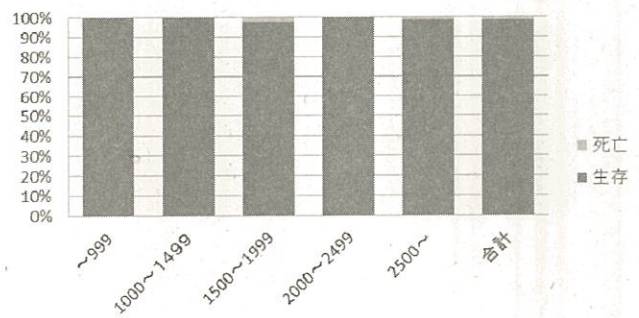
図3人工呼吸、NO吸入、脳低温療法、S-TA投与の件数



在胎期間別生存率



出生体重別生存率



(清水正樹)

代謝・内分泌科

平成 28 年度の初診患者数は 533 名：前年比+20(院外 397 名：+67, 院内 136 名：-47), 再来患者数は 9,001 名：前年比-427, 入院患者数は 304 名：前年比-3 であった。今年度は、前年度に比べて初診患者数が大幅に増加し、特に院外からの紹介患者数が増加していた。しかし、再来患者数は大幅に減少した。その原因は移転に伴う、12 月から 1 月の患者制限のためと思われる。

外来：初診の主訴・病名は、低身長（発育障害を含む）242 名、乳房腫大 31 名、甲状腺機能低下症：29 名、新生児マス・スクリーニング関連 39 名（TSH14 名、 17α -OHP8 名、タンデム関連 9 名）、思春期早発症（疑いも含む）37 名、甲状腺腫 8 名、甲状腺機能亢進症 7 名、糖尿病 7 名（1 型 6 名、2 型 1 名）、肥満 21 名、等であった。今年度の外来患者の特徴は、低身長および思春期早発症を主訴とした患者数が大幅に増加したことである。

入院：低身長精査 39 名、ムコ多糖症 2 型 3 名（延べ 147 回の入院）、糖尿病 7 名（1 型 6 名、2 型 1 名）、骨形成不全症等の治療 20 名、甲状腺機能亢進症 5 名、先天性甲状腺機能低下症 5 名、思春期早発症の精査 23 名、新生児マス・スクリーニングの代謝関連の精査 12、等の入院があった。今年度は、入院患者数は昨年とほぼ同様であったが、例年と比べて低身長の精査数が少なかったが、思春期早発症の精査数が大幅に増加した。また、新生児マス・スクリーニングの代謝関連の精査入院も 12 例と増加していた。これは、昨年も記載したが、5 年前から新生児マス・スクリーニングにタンデムマスが導入され、見つかって来る代謝疾患の精査を当科ですることが増えているためと考えられる。また、ムコ多糖症の 1 日入院が延べ 147 回と全体の約 48% を占め、割合としては最も多かった。

今年度も貴重な症例を経験することができたので、1 例を紹介する。未治療バセドウ病母体より出生し、中枢性甲状腺機能低下症を呈した症例である。母体の過剰な甲状腺ホルモンが経胎盤的に移行し、胎児の視床下部-下垂体-甲状腺系を抑制したことが発症要因と考えられた。甲状腺ホルモンの欠乏は成長発達に影響を来す可能性があるため、早期発見および適切な対応が重要である。

昨年度も紹介したが、現在、長時間作動型成長ホルモン製剤の治験を行っている。成長ホルモン分泌不全性低身長症の患者さんは毎日夜成長ホルモンの注射をしなければならない。しかし、この治験薬は 2 週間に 1 回の注射ですみ、しかも効果は同等なので、患者さんの負担は大幅に軽減され、成長ホルモン治療の大幅なコンプライアンス向上が期待される。今後、ムコ多糖症 2 型に対して、中枢神経系への移行が期待できる酵素補充療法や軟骨無形成症に対する CNP などの治験を準備中である。このように、現在患者さんにとって非常に期待できる新薬がいくつかある。症例数の多い当科としては、患者さんのためになることなので、治験には積極的に取り組んでいきたいと考えている

(望月 弘)

平成 28 年度の科員は下記のとおりである。

望月弘（副病院長，日本小児科学会専門医，日本内分泌学会専門医・指導医）

会津克哉（科長兼副部長，日本小児科学会専門医）

河野智敬（医長，日本小児科学会専門医，臨床遺伝専門医）

和氣英一（医員，日本小児科学会専門医）

木村 妙（レジデント，日本小児科学会専門医，平成 28 年 4 月～現在に至る）

橋本逸美（防衛医科大学小児科からの研究生，日本小児科学会専門医，平成 28 年 2 月～29 年 1 月）

腎臓科

平成 28 年度は、常勤とレジデント合わせて 6 名にて、外来（腎臓、透析：月曜～金曜日）6802 名（新患 141 名）入院の診療（入院人数：210 名、延べ人数 2886 名）をおこなった。全身麻酔下の腎生検は 63 件（経皮 60 件、腹腔鏡下 3 件）で、その内訳は微小変化 28 例、FSGS 3 例、IgA 腎症 5 例、HSPN 9 例、MPGN 4 例、MN 4 例、ループス腎炎 6 例、Alport 症候群 2 例、PIAGN 1 例、間質性腎炎 1 例であった。新病院移転の影響で、昨年度より入院患者数、腎生検施行例はやや減少した。腹膜透析を行っている末期腎不全患者は、昨年度同様に 5 名である。移植後患児のフォローは、定期外来（第三月曜日）にて東京女子医大腎臓小児科教授の服部元史先生にお願いしている。また急性血液浄化療法は合計 10 人で、その内訳は CHD 9 件、エンドトキシン吸着療法 7 件、血漿交換 1 例（重複あり）であった。本年度も日本小児科学会、日本小児病学会、日本小児腎不全学会などで多数の発表や英語論文での報告を行った。

一方、夜尿外来は、金曜日の午前、午後を 2 名が担当した。患者数は 1315 名（新患 53 名）であった。本外来の特徴としては、ADHD など依存症合併や難治例が多いことであり、日本夜尿症学会において中学生で持続する患児の特徴に関する発表を行った。さらに 12 年ぶりに改定された「夜尿症 診療ガイドライン 2016」の作成委員として参加した。

藤永周一郎（科長兼副部長、小児科学会専門医、指導医、日本腎臓学会専門医・指導医）

櫻井俊輔（医長、小児科学会専門医）

櫻谷浩志（医長、小児科学会専門医）

掛川大輔（レジデント、小児科学会専門医）

水谷亮（レジデント、5 月まで、小児科学会専門医）

西野智彦（レジデント）

齋藤真人（レジデント、6 月より）

感染免疫・アレルギー科

平成 28 年度の外来患者数は 3,856 名、新患は 138 名、入院患者数は 691 名であった。平成 27 年度と比べて外来患者数は 298 名減（新患数は 17 名減）で、入院患者数は 27 名増加した。

- 1) 感染免疫・アレルギー科は、日本リウマチ学会の教育施設に認定されており、小児リウマチ学会の「小児リウマチ中核施設」の候補施設にも指定されている。このような施設が全国で 57 施設予定されている。そのため、県下全域から患者紹介をうけている。診断のつきにくい症例、重症の症例が含まれている。若年性特発性関節炎・高安動脈炎・ベーチェット病・乾癬性関節炎・若年性皮膚筋炎・多発血管炎性肉芽腫症・関節リウマチ・クリオピリン関連周期性症候群などの疾患に対する生物製剤の使用を行っている。その他の免疫抑制剤も積極的に使用し、一方で感染症対策も十分に配慮しながら、診療を行っている。薬物療法で治療効果不十分の重症例においては、腎臓科の協力のもと、積極的に血漿交換・白血球除去療法を行っている。さらに治療効果の判定や病態解明のために、他施設では行っていない、サイトカイン測定をルーチンに行っており、治療方針決定の際のバイオマーカーとして役立っている。
- 2) 川崎病については、重症例・難治例を多く受け入れ、ステロイドやシクロスポリンに加え、生物学的製剤（レミケード）の併用も行っており、冠動脈病変の発生を未然に防いでいる。また、循環器科と緊密な連携をたもちながら高度な医療を積極的に行っている。
- 3) 先天性サイトメガロウイルス感染症に対する抗ウイルス治療を行う日本でも数少ない施設である。ウイルス量のチェックをしながら、また、ガンシクロビル血中濃度モニタリングをきめ細かく行いながら、治療を行っている。当院耳鼻咽喉科との協力において他施設からの診療依頼も多く、県外からの患者受け入れも増えてきている。
- 4) この度新たに日本小児感染症学会認定指導医（専門医）教育研修施設にも認定され、研修プログラムを開始する予定である。この施設は全国で 25 施設に限られ、関東地区では 9 施設、埼玉県では当院が唯一の認定施設である。院内の感染対策については、ICTと協力しながら、積極的な助言を行っている。
- 5) 当科の診療する感染症については、肺炎・気管支炎・中耳炎・副鼻腔炎・蜂窩織炎・ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群、リンパ節炎、敗血症・感染性心内膜炎・抗酸菌感染症・咽後膿瘍・細菌性腸炎・腎盂腎炎等の細菌感染症、アデノ・RS・EB・サイトメガロウイルス感染症・流行性耳下腺炎・水痘ウイルス感染症・ウイルス性気管支炎・肺炎・ウイルス性胃腸炎・ウイルス性髄膜炎・慢性活動性EBウイルス感染症・ウイルス関連血球貪食症候群等ウイルス感染症、マイコプラズマ感染症等などが挙げられる。既に抗菌剤が投与されているために培養で起炎菌を確定できない重症細菌感染症においても他施設に先駆けてTm mapping法を導入することにより、起炎菌が迅速に同定できるようになった。
- 6) アレルギー疾患においても、食物負荷試験をおこなっている。

(川野 豊)

スタッフ

- 川野 豊 (科長兼部長 日本小児科学会専門医 日本アレルギー学会指導医 日本リウマチ学会専門医)
- 高野 忠将 (副部長 日本小児科学会専門医)
- 菅沼 栄介 (医長 日本小児科学会専門医)
- 佐藤 智 (医長 日本小児科学会専門医 日本アレルギー学会専門医 日本リウマチ学会専門医)
- 上島 洋二 (医長 日本小児科学会専門医)

血液・腫瘍科

外来患者は新患 230 名（表 1），入院は延べ 902 名（実数 244）であった（表 2）。平成 28 年度は外来新患者数は前年度に引き続き増加傾向となったが、入院実数は病院移転に伴う入院患者制限のためやや減少した。病院移転後、2 月以降は再び増加傾向に転じた。外来初診患者は ALL 25 名，AML 6 名，悪性リンパ腫 10 名，神経芽腫は 5 名であった。例年と比べて ALL が多い傾向が続いている。セカンドオピニオンの患者が 9 名あった。当センターが小児がん拠点病院に指定されたこともあり、セカンドオピニオンは増加傾向にある。平成 28 年度は造血幹細胞移植を 20 例で行った。（表 3）。当センター開院以来最多の移植症例数であった昨年の 43 例からは大きく減少したが、これも病院移転に伴って移植実施数を制限した影響である。移植ドナー別では非血縁者 9 例，血縁者 5 例，自家 6 例であった。同種移植の中では非血縁者間臍帯血移植が 9 例ともっとも多く、最近の傾向を引き継いでいる。平成 28 年度は 11 例の死亡があった。うち 4 例で死後の病理検査が行われた。

スタッフ紹介

- 花田良二（副院長、日本小児科学会専門医、小児血液・がん暫定指導医、日本がん治療認定医機構がん治療暫定教育医）
- 康 勝好（科長兼部長、日本小児科学会専門医/指導医、小児血液・がん専門医/指導医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医/指導医、日本血液学会認定血液専門医/指導医、日本造血細胞移植学会認定医）
- 荒川ゆうき（医長、日本小児科学会専門医/指導医、日本血液学会認定血液専門医、小児血液・がん学会専門医）
- 森麻希子（医長、日本小児科学会専門医/指導医、日本血液学会認定血液専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、小児血液・がん学会専門医）
- 磯部清孝（医員、日本小児科学会専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医）
- 渡邊健太郎（医員、日本小児科学会専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医）
- 板橋寿和（レジデント、日本小児科学会専門医）
- 柳 将人（レジデント、日本小児科学会専門医）
- 川上領太（レジデント、日本小児科学会専門医）

表1 外来初診患者内訳（下記その他、セカンドオピニオン9例）

ALL(急性リンパ性白血病)	25		再生不良性貧血および類縁疾患	3	
AML(急性骨髄性白血病)	6		貧血その他良性血液疾患	79	
TAM(一過性骨髄異形成)	6		特発性血小板減少性紫斑病		24
MDS(骨髄異形成症候群)	2		鉄欠乏性貧血		11
JMML(若年性骨髄単球性白血病)	1		溶血性貧血		8
CML(慢性骨髄性白血病)	1		伝染性単核症		1
悪性リンパ腫	10		血友病		7
神経芽腫	5		好中球減少症		8
その他の固形腫瘍	54		その他		20
胚細胞腫瘍		9	副腎皮質ジストロフィー	1	1
ランゲルハンス組織球症		3	その他良性疾患	37	
肝腫瘍		2	リンパ節炎		4
脳腫瘍		8	骨髄/末梢血幹細胞提供者		3
網膜芽種		1	その他		30
横紋筋肉腫		1		230	
腎芽腫		1			
血管腫		21			
リンパ管腫		3			
その他		5			

表2 入院患者内訳（括弧内は実数）

	一般病棟
ALL(急性リンパ性白血病)	327 (68)
AML(急性骨髄性白血病)	41 (17)
MDS(骨髄異形成症候群)	21 (11)
CML(慢性骨髄性白血病)	10 (2)
悪性リンパ腫	59 (14)
神経芽腫	82 (15)
横紋筋肉腫	4 (4)
脳腫瘍	67 (9)
その他腫瘍性疾患	99 (36)
再生不良性貧血及び関連疾患	18 (6)
血友病ないし関連疾患	3 (3)
特発性血小板減少性紫斑病	60 (26)
その他良性血液疾患	103 (28)
造血細胞移植ドナー	8 (5)
計	902 (244)

表3 造血幹細胞移植（2016年度）

症例	年齢	性	移植日	診断	移植種類	ドナー
1	7	M	2016/4/4	ALL	骨髓+末梢血	血縁
2	2	M	2016/5/2	NBL	末梢血	自家
3	4	F	2016/5/20	NBL	骨髓	自家
5	8	F	2016/5/25	ALL	骨髓	血縁
6	11	F	2016/6/1	ALL	臍帯血	非血縁
7	14	M	2016/6/7	AML	臍帯血	非血縁
8	5	M	2016/7/28	NBL	末梢血	自家
4	4	F	2016/8/15	NBL	臍帯血	非血縁
10	8	F	2016/8/15	NBL	末梢血	自家
9	13	M	2016/8/23	AML	臍帯血	非血縁
11	4	M	2016/8/23	ALL	臍帯血	非血縁
12	17	M	2016/9/20	AML	末梢血	自家
13	13	F	2016/10/3	AML	臍帯血	非血縁
14	8	F	2016/10/11	ALL	臍帯血	非血縁
15	6	M	2016/10/20	NBL	末梢血	自家
16	2	M	2016/10/27	AML	骨髓	血縁
18	7	M	2016/11/4	ALL	臍帯血	非血縁
17	2	M	2016/11/25	AML	末梢血	血縁
19	3	M	2016/12/16	AML	臍帯血	非血縁
20	2	M	2017/2/1	AML	骨髓	血縁

ALL：急性リンパ性白血病，AML：急性骨髄性白血病，NBL：神経芽腫

遺伝科

遺伝科では、1) 遺伝診療、2) 遺伝性疾患に対する精密診断、3) 遺伝性疾患の原因解明と治療に向けた共同研究の推進の3つの柱で診療を行っている。

1. 遺伝診療

1) 個別外来：本年度の初診患者 368 人の疾患内訳を表 1 に示す。

2) 集団外来

ダウン症候群総合支援外来 (DK外来)、プラダーウィリー症候群外来 (PW外来)、種々の先天異常症候群についての集団外来を継続している (保健発達部門、遺伝相談外来と遺伝相談事業の欄参照)。

2. 遺伝検査室での遺伝性疾患の精密診断

遺伝性疾患の精密診断として、染色体・FISH診断、遺伝子解析 (シーケンス、MLPA)、染色体マイクロアレイ検査を行っている。さらに、次世代シーケンサーを用いたエキソーム解析にも着手している。

3. 遺伝性疾患の原因解明と治療にむけた共同研究の推進

骨系統疾患 (理化学研究所) の共同研究を継続している。さらに厚生労働省難治性疾患克服研究事業として、ヌーナン症候群 (東北大学)、染色体微細構造異常症候群 (藤田保健衛生大学)、先天異常症候群 (慶応大学) に関する共同研究なども継続している。

(大橋 博文)

スタッフ

大橋博文 (科長兼部長 日本小児科学会専門医、臨床遺伝専門医)

清水健司 (副部長 日本小児科学会専門医、臨床遺伝専門医)

表 1. 2016年度 遺伝科初診

Aarskog syndrome	1	13 trisomy	2	Muenke syndrome	1
achondroplasia	2	der (13;14)	1	myelomeningocele	1
albinism	1	r(13)	1	myotonic dystrophy	1
Allan-Herndon-Dudley syndrome	1	15q11.2 microduplication	2	Neonatal cholestasis	1
Angelman syndrome	2	17p13.3 microduplication	1	Neurocutaneous syndrome	1
Aniridia	1	18 trisomy	2	NF-1	20
Apert syndrome	1	20p13 trisomy/tetrasomy	1	Noonan syndrome	6
Autistic spectrum disease	2	21 trisomy	84	Noonan syndrome related disorders	2
Baraitser-Winter syndrome	1	21 trisomy mosaic	2	normal	8
Beckwith-Wiedemann syndrome	2	21 trisomy, translocation	4	non-specific connective tissue disorders	2
branchio-oto-renal syndrome	2	21 trisomy dic r (21)	1	oculo-auriculo-vertebral spectrum	1
CHARGE syndrome	2	22q11.2 deletion syndrome	4	optic nerve hypoplasia	1
Coffin-Lowry syndrome	1	Xp22.33 duplication	2	overgrowth	1
Coffin-Siris syndrome	2	47, XXX	3	Pai syndrome	1
congenital cataract	1	49, XXXX	1	Peter anomaly	1
congenital lymphedema	1	idic(Y) (q11.2)	1	Pfeiffer syndrome	1
congenital myopathy	1	distal arthrogyrosis	2	Phelan-Macdermid syndrome	1
Cornelia de Lange syndrome	1	Duane-radial ray syndrome	1	Pieper-Robin sequence	2
craniosynostosis	6	Ehlers-Danlos syndrome	1	Prader-Willi syndrome	2
Crouzon disease	1	Fanconi anemia	1	Rett syndrome	2
chromosomal abnormality		Gitelman syndrome	1	Rieger anomaly	1
1p36 deletion	1	fetal hydrps	2	Rubinstein-Taybi syndrome	2
t(1;3)(p13.3;q12), t(3;8)(p13;q24.1)	1	hemihyperplasia	5	Russell-Silver syndrome	5
t(1;7)(p32;q22)	1	Hirschsprung disease	2	Salla disease	1
t(1;17)(p34.3;q11.2)	1	hypohydrtic ectodermal dysplasia	1	Schimmelpenning-Feuerstein syndrome	1
1q21.1 microduplication	1	hypochondroplasia	1	short stature	3
1q42 duplication/3p26deletion	1	hydrocephaly	2	skelatal dysplasia	2
2p16-p22 duplication	1	ID or DD	3	skin depigmentation	1
4q13.2-q21.21 interstitial deletion	1	incontinentia pigmeti	5	Smith-Magenis syndrome	1
t(4;14)(q25;q13)	1	Kabuki syndrome	3	Sotos syndrome	8
5p monosomy	1	Klippel-Feil syndrome	2	spinal muscular atrophy	1
7q22.1-q31.2 interstitial deletion	1	Klippel-Trenaunay-Weber syndrome	1	Sprengel deformity	1
7q31.2-q32.3 interstitial deletion	1	macrocephaly	2	Sturge-Weber syndrome	1
8 trisomy mosaic	2	macrocephaly-capillary malformation syndrome	1	tuberous sclerosis complex	2
8p23.3-p23.1 deletion/8p23.1-p21.1 duplication	1	MCA	31	Williams syndrome	4
9p trisomy	1	MCA/ID or DD	49		
12q14.1-q14.3 interstitial deletion	1	migrating partial seizures of infancy	1	計	368

循環器科

平成 28 年度の入院患者および外来新患の内訳は表 1 および表 2 に示す通りである。入院患者数は 445 名とやや減少している。これは移転の際の、入院制限の影響と考えられる。

外来新患数は逆に増加し 780 名であった。今後、新病院では周産期センターの稼働により、さらに新患数は増加することが期待される。しかし小児科の新患数減少は社会的な問題であり、さらに新患数増加のために努力が必要である。

心臓カテーテルの件数は 268 件と昨年同様であったが、インターベンションカテーテル（カテーテル治療）は 58 件で昨年より 17 件増加した。Amplatzer 閉鎖栓（心房中隔欠損・動脈管開存）の治療が安定してきたことなどが要因と考えられる。特に動脈管開存は、誌上発表の影響もあり、めざましく増加している。

検査部門では、心エコー検査・経食道エコー検査が増加し、胎児エコー検査も順調に増加している。新病院では、周産期センター稼働に伴い、胎児エコーの重要性がさらに増してくる。

新病院移転後、集中治療部門が独立し、病院全体の入院患者数・手術数が増加している。今後、さらに質の高い医療を行うためには、各部門との協力がより重要となる。

心臓検診は昨年同様 50000 人以上行っている。さいたま市の一部にも積極的に関わり、精度の高い検診を目指している。

(星野 健司)

表 1 入院患者疾患別内訳

入院患者数	445
先天性心疾患	395
不整脈	18
川崎病	13
その他	19
(死亡)	5

表 2 外来新患疾患別内訳（併科を含む）

外来新患数	780
先天性心疾患	367
不整脈	65
川崎病	54
その他	294

表 3 心臓カテーテル検査症例内訳

268件

心室中隔欠損	43	ファロー四徴症	24
心房中隔欠損	22	総肺静脈還流異常	7
動脈管開存	17	完全大血管転換	25
房室中隔欠損	17	肺動脈閉鎖	8
肺動脈弁狭窄	10	総動脈幹遺残	1
大動脈弁狭窄	11	単心室	2
僧帽弁閉鎖不全	2	大動脈縮窄複合	11
両大血管右室起始	18	大動脈弓離断	4
修正大血管転換	7	三尖弁閉鎖	3
川崎病(冠動脈瘤なし)	6	左心低形成症候群	9
川崎病(冠動脈瘤あり)	5	その他	16

インターベンションカテーテル 58 件

神経科

平成28年度の神経科外来初診者数は、下表の如く539名と、平成27年度に比し44名(8.9%)増加しています。新病院移転で、診療制限を行ったことを考慮すると、期待以上の増加と言えると思います。

主訴・診断名別で、前年度に比し初診患者数として最も増加したのは精神運動発達遅滞で、前年度46名から117%と倍増しており、そのほかの主訴・診断名では顕著な変化は生じておりません。入院患者数はのべ245名と、35名(16.7%)増加した。中でも、重複障害児の感染症の入院が18名、72%、痙攣性疾患の入院が20名、27.8%増加していました。痙攣性疾患のご紹介に関しては、ここ数年200名前後と安定しております。埼玉県全体で精神科、脳外科も含めてんかん専門医が16名のところ、当センターには25%にあたる4名在籍していることから、痙攣性疾患のご紹介に関しては、地域からの信頼も得て、引き続き多数のご紹介をいただいているものと考えております。

平成28年度は平成8年から始めた埼玉県立小児医療センターてんかん教室が満20年を迎えたことを記念し、さいたま新都心の埼玉県男女共同参画推進センターにおいて、県民セミナー『てんかんをもっと身近に考える』を開催しました。内容は、『てんかんの基礎知識：てんかんって何?』(浜野晋一郎)、てんかん発作時の対応と観察・・・(埼玉県立小児医療センター外来・救急看護師 滝口美和子)、てんかんの薬物治療：お薬について知ろう(平田佑子)、難治てんかんの課題と家族全体での看護(松浦隆樹)、てんかんの子どもたちのところと発達(埼玉県立小児医療センター臨床心理士 成田有里)、てんかんの子どもの思春期から成人期の課題：自動車運転免許と妊娠、出産に備えた対応(菊池健二郎)の6講演で構成いたしました。一般市民を対象に150名の予定で参加希望を広報したところ、締め切り1か月前には定員に達し、電話での対応が困難なこともあったため、急遽スクール形式の講義を取りやめ、座席のみとして209名の予約まで受け入れることに変更しました。それでも、その後100名以上の参加希望あり、やむなくお断りした次第でした。一般市民のてんかんに対する情報の渴望を肌で感じ、今後もこの様な活動を継続していく必要性を強く感じました。講師として参加してくれた、滝口看護師、成田臨床心理士、元神経科の平田佑子医師、菊池健二郎医師、現神経科の松浦隆樹医師、ならびにセミナーの運営を支えてくれた、高橋よね子師長と多数の外来看護師、保健発達部 吉岡副部長とコメディカルスタッフ、神経科の樋渡えりか医師、池本智医師、田中学医師(現、総合診療科科長)、南谷幹之医師、ならびにてんかん教室発足時からサポートしてくれている中田尚子循環器・呼吸器病センター副部長に感謝申し上げます。恒例のてんかん教室は、平成28年11月12日に開催し、参加者は80名ののびりました。神経科の池本智医師が『動画で見る様々なてんかん発作型と初期対応』、樋渡えりか医師が『てんかんを持つ子どもたちの生活上の注意点』について講演し、参加者からは動画を用いて講演した点などを中心に、大変わかりやすかったと好評を得ました。

患者と養育者への教育、広報活動としてのてんかん教室とならんで、埼玉県立小児医療センター神経科の教育、広報活動のもう一つの柱が、小児神経科医の育成です。その、小児神経科医のすそ野拡大を目的に開始した埼玉県立小児医療センター・東京慈恵会医科大学小児科合同小児神経学セミナーは、2016年7月9日に第9回セミナーを開催しました。神経科の松浦隆樹医師が『神経疾患の診察で注意すべきこと』、池本智医師が『けいれん性てんかん重積状態』、当センターレジデントOBの現、慈恵医大附属病院小児科の日暮憲道医師が『知っておきたい小児神経の最近の話題；てんかん関連突然死』、そして慈恵医大附属病院 柳原聡子臨床心理士が『小児の心理検査と心理的介入のポイント』について講演しました。参加者は33名に上り、今後の当センターレジデントへの応募などにおいて手ごたえを感じました。

末筆ながら、上述のてんかん教室、ならびに今年20周年を記念して開催した県民セミナーの成功は、ボランティアで参加している外来看護師、看護助手、保健発達部スタッフに依存しており、この場をお借りし看護部と保健発達部スタッフの皆様に、重ねて御礼申し上げます。あわせて、埼玉県男女共同参画推進センターとの共催でご尽力いただきました小川正副局長にあらためて感謝申し上げます。

浜野 晋一郎 (部長兼科長, 小児科専門医, 小児神経専門医, てんかん専門医)
南谷 幹之 (副部長, 小児科専門医, 小児神経専門医, 小児精神神経学会認定医)
小一原玲子 (医長, 小児科専門医, 小児神経専門医, てんかん専門医)
松浦 隆樹 (医長, 小児科専門医, 小児神経専門医, てんかん専門医)
池本 智 (医員, 小児科専門医)
樋渡 えりか (レジデント, 小児科専門医)
久保田 淳 (レジデント, 小児科専門医)
文責 神経科科長 浜野晋一郎

平成28年度神経科外来初診患者539名

: 神経科関連外来初診(神経科539+発達外来593+スクリーニング外来106)合計 1238名

神経科外来 初診患者主訴・診断名別分類

痙攣性疾患とその疑い	191	転換性障害など, 精神科系疾患	17	
てんかん (うちWest症候群) 熱性けいれん 新生児けいれん 発作性動作誘発性 ジスキネジア	149	チック	19	
	(3)	慢性頭痛	24	
	26	失神・起立性調節障害	20	
	0	発達障害	精神運動発達遅滞 (染色体、遺伝子異常含む)	100
	2		自閉症スペクトラム・ADHD	18
感染・免疫 関連疾患	急性脳炎・脳症	1	脳性麻痺	16
	急性小脳失調など	1	脳形態異常	3
筋疾患	6	(うち脳形成異常)	(2)	
(うち重症筋無力症)	(1)	(うち水頭症)	(0)	
脊髄前角-末梢神経	5	(その他)	(1)	
(うち顔面神経麻痺)	(4)	頭蓋内腫瘍	1	
(うち脊髄性筋萎縮症)	(1)	睡眠障害・夜驚症	3	
脳梗塞	2	むずむず足症候群	1	
頭部外傷	5	先天代謝異常症	1	
先天代謝異常症	0	その他	84	
変性疾患の疑い	1	神経科関連 保健発達部門	アセスメント外来	106
神経皮膚症候群	20		発達外来	593
(うち神経線維腫症)	(10)		自閉症スペクトラム障害	300
(うち結節性硬化症)	(3)		知的障害	145
(そのほか)	(7)		その他	148

平成28年度神経科入院患者(延べ)

245人(死亡1人)

けいれん性疾患	92
てんかん (うちWest症候群・點頭てんかん7人) 熱性けいれん, その他の機会関連性発作	82
	(9)
	1
急性脳症・脳炎(うちHHV-6関連2)	6
神経免疫性疾患*(うち重症筋無力症11、急性小脳失調症1、CIDP30、その他3)	45
代謝性疾患・脳変性疾患	3
神経皮膚症候群	9
重複障害児の感染症	43
重複障害児の筋緊張亢進	6
重度障害児の社会的事情による入院(レスパイト等)	4
筋疾患	0
筋疾患児の気道感染症	0
末梢神経障害	1
脳脊髄血管障害	1
転換性障害	10
その他(死亡1; 肺炎、基礎疾患に脳性麻痺、症候性てんかん)	25

精神科

精神科では、院内他科からの依頼により診療を行っている。外部からの紹介は全て、保健発達部精神保健外来にて診療を行っている。主たる主訴（表1）、主たる診断名（ICD-10による：表2）、年齢（表3）、依頼科（表4）は以下の通りである。昨年度は心理外来との連携を確立し、院内他科からの依頼を多く受けられるように努めた。発達の問題、身体症状、行動の問題を主訴にした紹介が多い。

表1 2016年度精神科外来主訴別新規患者数

主訴	新規患者数(人)
発達・言語の遅れ	31
行動の問題	41
不登校	9
身体症状	7
遺糞・遺尿(排泄の問題)	0
チック	4
強迫的行動、強迫観念	0
抜毛	1
過度の不安	1
抑うつ状態	0
希死念慮・自殺企画・自殺行為	0
睡眠の問題	2
虐待	4
その他	4
計	104

表4 2016年度精神保健外来紹介元別新規患者数

診療科	新規患者数(人)
保健所	0
市町村保健センター	2
児童相談所	3
学校	3
教育センター	3
他医療機関	90
市町村福祉	2
その他	1
計	104

表2 2016年度精神科外来疾患別新規患者数

ICD-10 診断カテゴリー	新規患者数(人)
F3 気分(感情)障害	
F32 うつ病エピソード	0
F4 神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害	
F41 他の不安障害	3
F43 重度ストレス反応 [重度ストレスへの反応]および適応障害	6
F44 解離性(転換性)障害	0
F45 身体表現性障害	5
F5 生理的障害および身体的要因に関連した行動症候群	
F50 摂食障害	1
F6 精神のパーソナリティおよび行動の障害	
F63 習慣および衝動の障害	1
F7 精神遅滞 [知的障害]	
F70 軽度精神遅滞	14
F71 中度[中等度]精神遅滞[知的障害]	0
F8 心理的発達の障害	
F81 学力の特異的発達障害	0
F84 広汎性発達障害	50
F9 小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害	
F90 多動性障害	14
F93 小児期に特異的に発症する情緒障害	1
F94 小児期および青年期に特異的に発症する社会的機能の障害	4
F95 チック障害	5
計	104

表3 2016年度精神科外来年齢区分別新規外来患者数

初診時年齢区分	新規患者数(人)
幼児期前半	1
幼児期後半	11
小学前半	42
小学後半	40
中学生	8
高校生	2
計	104

<外科系診療部門>

小児外科

今年度は、新病院が完成し、年末に新病院へ移転という大イベントが無事に終了した。県内小児外科の病院の先生方には多大なるご協力を頂き、移転後の新規増設部門であるPICUやHCU、埼玉赤十字病院と一体運用される総合周産期母子医療センターの立ち上げもスムーズに行えた。一方で他院小児外科との協力関係は、県内の小児外科医が定期的に集まって症例を共有することで継続的に行われ、小児外科関連の施設と緊密な連携を行った。

例年通り、当院では内視鏡手術に重きを置き、患者様への負担の軽減、機能的ハンディキャップを軽減した手術を行った。一昨年来、内視鏡手術に対する社会の不安が多く聞かれる様になり、小児外科分野における内視鏡手術の普及のために、患者様ご家族への分かりやすい説明など、より一層の努力が必要であると痛感している。

平成28年度(平成28年4月-平成29年3月)の外来患者総数は6058名、うち新来患者は801名であった。前年度に比べて総数では385名増加し、新患者数は271名増加した。入院患者総数は826名で、前年より48名増加した。患者平均在院日数は7.6日と前年度より0.9日短縮した。入院患者、緊急手術、内視鏡手術の年齢分布は表1の如くであった。新生児数は前年度より1名増加し45名であった。16歳以上の入院患者は48名で、内科・外科で経過観察中の重症心身障害児症例や、他院で長期間経過観察の後に当センターでの内視鏡手術を希望された症例であった。

平成28年度の入院患者の主たる疾患別分布、手術の内訳を表2に示した。鼠径ヘルニアは嵌頓を含め215名で最も多く、うち207例が手術を受けた。新生児疾患では、鎖肛(26例)が最も多く、ヒルシュスプルング病(16例)、食道閉鎖症(8例)、腸回転異常症(7例)、腸閉鎖症(6例)が続いた。横隔膜ヘルニアは1例、その他胃破裂(1例)、壊死性腸炎(1例)などで、総合周産期母子医療センターの設置に伴い、出生前診断に基づいて周産期センターへ母体搬送された症例が認められる様になった。悪性腫瘍は、神経芽腫群腫瘍が9例、肝腫瘍が2例、奇形腫群も13例と例年より減少傾向となった。肝胆道疾患で、胆道閉鎖症の多くは胆管炎、肝機能異常などの治療のための再入院であるが、新患2名に対しては肝門部空腸吻合が行われた。胆道拡張症では10例に手術が行われ、全例で内視鏡手術が実施された。

年間総手術件数は701件、緊急手術は218件であった。前年に比べ総手術件数は11件、緊急手術は11件増加した。麻酔科医の安定した人員の確保と新病院での手術室増設により、手術枠が増加したことにより手術件数が増加できたことが要因であろう。内視鏡手術は328件に行われ昨年と比較して18件減少し、単孔式腹腔鏡下鼠径ヘルニア根治術(SILPEC)が201件、虫垂炎、噴門形成術に加え、その他の疾患の多くに内視鏡手術が導入された。内視鏡手術の内訳として、鼠径ヘルニア根治術(215件)、虫垂切除術(55件)、噴門形成術(14件)、漏斗胸に対するNUSS手術(3件)、完全胸腔鏡下肺葉切除術(3件)、鎖肛に対する腹腔鏡補助下造肛術(5件)、胆道拡張症に対する根治術(10件)、などがあげられる。

新生児外科症例はここ数年横ばいもしくは減少していたが、新病院で総合周産期母子医療センターの設置により周産期医療体制が強化され、より多くの新生児疾患に対応できる体制が整った。

(川嶋 寛)

スタッフ

- 川嶋 寛 (科長兼副部長、日本小児外科学会専門医、指導医、日本外科学会専門医、日本内視鏡外科学会技術認定医(小児外科部門)、日本内視鏡外科学会評議員、日本がん治療認定医機構暫定教育医、小児がん治療認定外科医)
- 鈴木 完 (医長、日本小児外科学会専門医、指導医、日本外科学会専門医)
- 藤雄木亨真 (医員、日本外科学会専門医9月まで)
- 鈴木啓介 (医員、日本外科学会専門医)
- 高見尚平 (医員、日本外科学会専門医)
- 柿原 知 (医員、日本外科学会専門医10月から)
- 森田香織 (医員、日本外科学会専門医)

田中保成 (レジデント、日本外科学会専門医)

表1 入院患者数、緊急入院、内視鏡の年齢分布

年齢	1ヶ月未満	1-12ヶ月	1-5歳	6-11歳	12-15歳	16歳以上	総計
患者数	45	86	348	185	114	48	826
比率(%)	5.4	10.4	42.1	22.4	13.8	5.8	100
内視鏡	2	27	163	88	37	11	328
比率(%)	0.6	8.2	49.7	26.8	11.3	3.4	100
緊急入院	12	21	31	54	49	15	182
比率(%)	6.6	11.5	17	29.7	26.9	8.2	100
緊急手術	29	20	49	51	54	15	218
比率(%)	13.3	9.2	22.5	23.4	24.8	6.9	100

表2 入院患者の主たる疾患別分布、手術の内訳

疾患名	患者数	手術計	内視鏡	病名1	患者数	手術計	内視鏡
新生児疾患(新生児期に治療していないものも含む)				その他の疾患			
横隔膜ヘルニア	1	1	1	鼠径ヘルニア・水瘤	215	207	203
食道閉鎖	8	7	1	臍ヘルニア	38	37	
食道閉鎖術後	6	6		臍炎、臍肉芽腫	1	1	
腸閉鎖、狭窄	6	6		腹壁ヘルニア	3	2	
腸回転異常	7	7	2	停留精巣	50	47	
ヒルシュ	16	10	4	GER	24	18	15
ヒルシュ術後	2	1		GER術後	10	9	5
ヒルシュ類縁	3			虫垂炎	55	41	38
低位鎖肛	11	10		腸重積	18	13	1
中間位、高位鎖肛	5	5		胆道閉鎖	3	2	
鎖肛術後	9	7		胆道閉鎖術後	6		
胃破裂	1	1		胆道閉鎖疑いで胆道閉鎖でない	2	2	1
NEC/LIPS	1	1		胃軸捻	1		
メッケル	1	1	1	胃十二指腸潰瘍	2	1	
				胆道拡張症	11	10	10
				胆道拡張症術後	4	1	
				膵炎	4	2	
腫瘍性疾患				イレウス	7	5	5
神経芽腫	9	9	2	気管	17	15	2
肝腫瘍	2	2		外傷	1		
奇形腫群	13	10	1	肺	10	8	3
リンパ管腫血管腫	24	18	3	異物誤飲、消化管異物	2	1	
ポリープ・ポリポーシス	1	1		結石	6	4	2
縦隔	2	1	1	自然気胸	6	6	5
WTなど腎腫瘍	1	1	1	食道狭窄	10	10	
悪性腫瘍(その他)	13	12	1	正中頸瘻・嚢胞	4	3	
				腸炎、腸間膜リンパ節炎	4	3	1
				尿管管	4	4	
				皮膚・皮下腫瘍	5	5	
				肛門病変	5	4	
				短腸症候群	15	6	
				脾臓	1	1	1
				腹痛精査	1		
				その他(CV挿入等)	139	116	18
				総計	826	701	328